愛知教育大学研究報告，43（人文科学編），pp. 103～115, February, 1994

〈セミオシス〉としての志向性

大　沢　秀　介

（英米文化選修）

Intentionality in Semiosis

Hidesuke OSAWA

(Department of British-American Studies)

1　はじめに

小論の主題は，心が，あるいは心の状態が「志向性」を持つ，あるいは何等かの内容を表現するとはどういうことか，ということである。

この問に対して，ここでは，パースの記号論[1]の枠組みからの答えを検討する。すなわち，「志向性」を持つとは，心の存立構造がパースの言う〈セミオシス〉（記号過程）を為すことである，という説である。

したがって，本論ではまず，「志向性」とはどのような概念かを説明する。そしてつぎに，パースの記号論の枠組みを簡単に紹介し，そのあと，パースの〈セミオシス〉の概念を使えば，志向性の本質的特徴が説明され得るという，T. L. ショートの説[2]を検討する。そして最後に，もしこの理論が正しいならば，心の哲学は今後どのような展開をすべきかをさぐる。

2　志向性とはなにか

2．1　心の特性としての志向性

デカルト，ロック以来の近代哲学のアポリアを生み出してきた諸前提，さらに限定して言えば，心の独自存在という近代の哲学的確信を支えてきた諸前提のうちで，最後まで残ったのは「意識」と「志向性」の存在であった[3]。両者ともにいかなる唯物論的な還元にも徹底して抵抗してきたのである。

その中でも志向性に関する問題は，心の表現する〈意味〉（Meaning）あるいは〈内容〉（Content）の問題として根強く生き続け，現代哲学の最も重要な論点となっている[4]。

19世紀の終わりに独墺学派の哲学者であった F. ブレンターノ（Franz Brentano (1838-1917)）は，〈心的なもの〉と〈物的なもの〉を隔絶する特徴を発見したと主張したが，それが「志向性（Intentionality）」であった。心的な現象は物的な現象と違って，つねに自己以外の何ものかに向けられている，何ものかを「志向」しているというのである。たとえば，〈思考〉は何ものかについての思考であり，〈知覚〉は何ものかの知覚であり，〈欲求〉や〈希望〉も何ものかへの欲求であり希望である。このように心的なものはただ

それだけ，たとえばただ〈思考〉しているだけという特徴づけはできず，必ずその内容が伴うというのがブレンターノの説のポイントである。この主張は「意識は何ものかへの意識である」というテーゼとしてE. フッサール（Edmund Husserl（1859-1938））以降の現象学派に引き継がれたが，現代では「心の内容」あるいは「心的表示とその内容との関係」として，いわゆる英米の分析哲学の流れの中に引き継がれている[5]。

2．2　志向性の本質…心と対象との内包的関係

ところで志向性を〈心〉とその〈内容〉との関係としてみた場合，その関係は非常に特殊なものであることがわかる。というのも心的現象の〈内容〉は，希望や欲求という言葉が示すものの場合からわかるように，実現していない内容，この世に存在しない対象であってもよいからである。「全世界に平和が訪れんことを！」という希望の表明や「あすは晴れて欲しい」という欲求は，その内容が現在の事実ではないということによって否定されるわけではない。このような心的現象の対象の特殊性は，伝統的には「志向的内在」（Intentional Inexistence）と呼ばれてきたものであるが，現代では以下の理由から内包性（Intensionality）と呼ばれることが多い。

1950年代に，アメリカの分析哲学者であった R. チザムが，ブレンターノの志向性の概念を現代哲学に復活させたとき，チザムは分析哲学の伝統にしたがって，意味論的上昇の方法を適用した[6]。その結果，ブレンターノの区別の問題は，言語問題に変換されたのである。意味論的上昇の方法とは，事態そのものではなく，一歩引いて，その事態を語るわれわれの言語を哲学的探求の対象とするという方法である。これによって心的現象の志向性の問題は，それを表現するためにわれわれが使う文の持つ特殊な論理の問題となった。

志向的現象と非-志向的現象のブレンターノの区別を反映するものとしてチザムが主張した志向的文と非-志向的文の区別は，大雑把に言えば，B. ラッセルが主張した「命題的態度」（Propositional Attitudes）を含む文とそれ以外の文の区別に対応していたと言ってよい[7]。ラッセルの命題的態度を含む文とは，英語で言えば，that 節を含む複文で，真理関数[8]とはならないものである。たとえば，

'John believes that it is raining'.

のような文であり，その真理値つまりその真偽は，そこに含まれる that 節内の文 'it is raining' の真偽には依存しない。（雨が実際に降っていようといまいと，ジョンがそう信じているということの真偽には影響しない）。このような that 節内の命題のように，全体の真理値に寄与しない対象を内包といい，命題的態度を含む文とは，そのような内包としての命題と主体との関係を表現していると考えられたのである。

2．3　心の内容と言語の意味

このジョンの信念文からもわかるように，このような「志向的語り方」（Intentional Idioms）（D. デネットの言い方に倣う）[9]は，大雑把に言えば，人の行為を説明する際に，その人と，その行為の理由の一つである信念内容（その人が世界をどのように考えているかを表現する命題）とを結び付ける役割を果たしているものである[10]。それゆえに，この種の語り方は，ひとびとに，彼らの心の状態が表現しているはずの「意味」を結び付けているものとも言える。或る命題をその意味内容として持つ言明，たとえば「雨が降っている」

という言明を正当に行なうことができる条件，つまり嘘をついているのではないことを保証する条件は，その人がその命題，つまり〈雨が降っているということ〉を信じていることであるから，言明の意味（言語的意味）と心が表現している意味は，もともと同一であると考えるのはそれほど不自然なことではない。このような発想に基づく「心の内容」の理論が，ここ十数年の間に徐々に有力になりつつあった「表示主義」あるいは「心の言語」仮説[11]にもとづく「内容の理論」である。この理論は，年代を同じくして発達した認知心理学，認知科学の基礎理論であり，現在では多くの心理学者の共通の科学的前提となったと言ってもよいだろう。

表示主義者によれば，信念，欲求，意図などの「志向状態」(Intentional States) の自然な理論が可能である。この理論によれば，心の志向状態は二つの側面を持つことになる。その一つは，たとえば信念を，欲求やその他の種類の志向状態から区別する〈機能的〉側面であり，他の一つは，それぞれの信念や欲求を，それとは別の信念や欲求から区別する〈内容〉的側面である[12]。雨が降っているという信念は，雨が降っているという命題を〈内容〉として持ち，傘をもって出かけるという行為の理由としての〈機能〉を果たす。そして家に留まりたいという欲求は，私が家に留まるという命題をその〈内容〉として持ち，出かけないで家に留まるという事実を実現する〈機能〉を果たすというわけである。

表示主義者もなぜ心の状態が志向性つまり内容を持つのか，それが内容を表示するとはどういうことかを説明する。しかも彼らはそれを自然主義的に説明しようとするのであるが，パース的な観点から見れば不完全の感を免れない。彼らの説明は，R. カミンズによれば，次の四つのタイプを持つ[13]。

1．類似説：心的状態Aが対象Oを表示するのは，AとOとの類似による。
2．共変説：心的状態Aが対象Oを表示するのは，Aの生起がOの生起と共変する (covary) ことによる。
3．機能役割説：心的状態Aが対象Oを表示するのは，Aが表示システム全体のなかで果たす役割，つまりそのシステムにおいて可能な認知プロセスによって課せられる，Aとその他の表示間の全関係の中で果たすAの役割による。
4．目的説：心的状態Aが対象Oを表示するのは，Oを直示 (indicate) すること（あるいはOと共変すること）がAの機能だからである。

3　パースのカテゴリーと表示の存立構造

以下では，パースの或る意味では非常に一般的な表示の理論の枠組みを略述し，次節での議論に備えることにする[14]。

パースの表示 (Representation) あるいは記号 (Sign) の理論を少しでも説明しようとすれば，パースが「現象学」(Phenomenology, Phaneroscopy)[15]と名付けた対象一般のカテゴリー分析から話を始めなければならない。これは彼の哲学のスタイル，あるいは彼の持っていた第一哲学への志向から来るのだが，良く考えてみれば，このやり方は，表示という研究対象の特異性に注意を払うには絶好の観点を提供する。

パースが数十年にわたって考え抜いたとされる現象学，われわれ人間に知られ得る対象の，非常に大胆ではあるが精密な方法論を持つ，そのカテゴリー分類は，以下のように極

めて単純なものである[16]。

第一性（Firstness）生（なま）の性質そのもの
第二性（Secondness）いまここに現れる一回的な出来事
第三性（Thirdness）繰返し現れる習慣的法則的媒介的存在（普遍者）

これらの極めて大まかなカテゴリーがどのように析出され，それぞれのカテゴリーにはどのような対象が分類され得るのかの議論は極めて魅力的で，かつ重要なものではあるが，ここではそれを詳述する余裕はない[17]。パースの表示の理論の構築には実際これらのカテゴリーがあらゆる局面で考慮されていた，という指摘に止めておくべきだろう。

かくしてまず考察されなければならないのは，〈表示〉という現象そのもののカテゴリーである。パースはそれを第三性に分類する。すなわち表示は，そのあらゆる種類のものを含めて，繰返し現われる得る〈媒介的普遍者〉として捉えられるのである。この特徴付けは，パースの全哲学と深く関係するものであり，個別者の実在のみを認める唯名論に対して，法則的なものの実在を認める普遍実在論から来ている，としかここでは言いようがない[18]。

この表示の媒介的法則的存在性と深く関連しており，また現代の表示理論にとって厳しい反省を強いられる点は，パースが表示存在を単なる一項的な性質や二項的な関係ではなく，それらには絶対還元不可能な（第一性と第二性を媒介する）三項的関係存在と捉えた点である[19]。上記のように現代の表示理論は，表示の構造を基本的には志向状態Aと対象Oとの二項の関係として捉えている。もちろん現代の表示理論でも暗黙のうちには解釈者が考慮されているのではあるが，パースの表示の理論から見れば，この暗黙性こそ，現代の表示理論が表示の本質を見失っている証拠なのである。簡単に言えば，それは，現代の表示主義が，表示を独立の記述を持つ個物間の関係と考えるという意味で，表示に対する（唯名論的な）誤った自然主義を採っているということである。

パースによれば，表示（Representation）とは，表示するものAとその表示対象O，およびAがOの表示であることを規定する解釈Bとの非還元的な三項関係である。したがって，もしこの関係が成り立っていなければ，それぞれの関係項であるA（表示項），O（対象項），B（解釈項）は表示とは全く関係ない別の記述を受け，それぞれ独立の対象となる。したがって，たとえばAがそれ自体でOの表示であるというような規定を受けることなど絶対にあり得ないわけで，パースによれば，〈表示〉はそのような意味で非還元的な三項関係なのである。

このような非還元的な三項関係である表示は，その構造局面の以下のようなカテゴリー的分類によって，幾つかの可能なタイプに分けられる。これらの分類は表示のタイプそのものの分類ではなく，可能な表示のタイプの分類の分類基準となるものである。パースは最終的には10種類の基準を提案しているが，ここではそのうち，以下の議論に必要な5種類の基準を列挙しておく[20]。

1．表示項の捉えられ方の分類：
　　生（なま）の性質として

出来事として
習慣的存在として

2．表示項が対象項を表示する根拠の分類：
性質の類似による
因果関係による
習慣による

3．対象項の分類
直接対象項…〈セミオシス〉の一段階において表示が示す限りでの可能的事態
実的対象項…〈セミオシス〉の連続的な過程によって到達される実在的事態

4．解釈項の種類の分類：
情態的解釈項…フィーリング
力動的解釈項…行動
論理的解釈項…言語表現

5．解釈項の現れ方の分類
直接解釈項…表示の根拠によって予め定められている解釈の種類
実的解釈項…〈セミオシス〉の一段階において実際に起こるフィーリング，行動，言動
目的解釈項…〈セミオシス〉の連続的な過程を一定方向に導く究極的な解釈項，習慣の形成あるいは習慣の変更

4　志向性のパース的説明

さきに示唆したように，現代の表示主義にも，表示の内容あるいは心的状態の志向性を説明しようとする試みがないわけではない。しかしパースがその構築を試みた一般表示理論の概念体系と比較してみても，かなり素朴であるという感を免れない。以下ではそのパースの一般表示理論の中核である〈セミオシス〉すなわち〈表示過程〉の分析に依拠すれば，志向性に対する一定の説明が得られるという T. L. ショートの理論[21]を検討する。

4．1　目的論的過程としての〈セミオシス〉

表示は実在しない対象をも表示し得る。このような対象の在り方を以下では〈志向的非存在〉と呼ぶことにする。これが志向性の理論を困難にしている元凶であるが，すべての解釈項が〈思考〉であると考えれば，これに対する説明は可能かもしれない。なぜならわれわれは実在しないものをも考えられるから，思考の志向性が表示の志向性を与えていると説明することができるからである。しかしパースはすべての解釈項が思考であるということを否定しているし，何よりも思考は表示の一種であり，人間の心は〈セミオシス〉の一種であると彼は主張しているのだから，この説明は無限退行になる。(このような，思考あるいは心をどこかに仮定する志向性の説明は，J. サールの言う「非本来的な志向性」[22]に対する説明であって，志向性そのものの説明としては無効である。)

パースはすべての解釈項が思考である可能性は否定したが，少なくとも1906年までは，解釈項が志向性を与えるという考え方を全面的に否定していたわけではない。しかし1906年に究極的論理的解釈項が習慣あるいは習慣変更であると言ったときに，この可能性も事

実上否定された。習慣はパースのいう意味での表示ではないからである。

表示の志向性は解釈項の志向性から得られるのではなく，表示項と解釈項の相互関係から得られる。したがって〈セミオシス〉そのものの中で志向性の分析を行なわなければならない。これがショートの主張であり，筆者が擁護しようとしているのもこの説である。

まず，次の記述に注目しよう。すなわち，パースが，“A Survey of Pragmaticism”(1907) 5.472-5.473 のなかで[23]，（二項の）物的な作用と，（三項の）知的な（intelligent）作用との区別を提起している記述である。

「記号の作用はもう少し綿密な注意を要する。力動的な，すなわち二項的な作用と知的な，すなわち三項的な作用との間の既述のような区別を思い起こしていただきたい。事象Aは粗暴な力によって事象Bを生み出すかもしれない。それから今度は事象Bが第三の事象Cを生み出すかもしれない。事象CがBによって生み出されようとしているという事実はAによるBの産出には全く影響を与えない。かかる影響を与えるということは不可能である。なぜならCを生み出すときのBの作用はBが生み出される時点では偶発的な未来事象であるからである。二項作用というのはそのようなものであり，それが二項的と呼ばれるのはその作用の各段階が一対の対象に関連するからである。[24]」

「しかし今，極微動物の運動が，たとえどのような低い知性であろうと，一応知性によって導かれているか否かについて，顕微鏡を覗き込んでいる者が疑念を抱くとき，私の学生時代にそういう人がいつも用いていた，そして今も用いていると思われるテストの方式は事象Aが次の事象Bを第三の事象Cの発生の手段として生み出すか否かを確かめることである。すなわちBが生み出されるのはBがCを生み出すか，または生みだしがちであるという条件の下においてであって，もしBがCを生み出さないなら，また生み出す傾向がないなら，Bは生み出されないのかどうかを彼は問題にするのである。[25]」

ショートによれば，パースのいう意味での知性（Intelligence）は非常に広い意味でのそれであり，主体がそれを気付いている必要もないし，意識している必要もない。またショートによれば，パースは，この記述から推測できるように，すべての三項関係を目的論的な（teleological）もの，言い替えれば「目的因」（Final Cause）の影響を含んでいるものと見做した[26]。したがってショートの解釈によれば，表示の過程である〈セミオシス〉も目的論的な過程ということになる。しかしもし〈セミオシス〉がこのような意味での知的な行動を含む目的論的な過程であるならば，表示項A，対象項O，解釈項B以外に，目的Cを含むことになり，表示の非還元的な三項関係性が失われることになる。これはどう解釈すべきなのだろうか。

ショートはこれについて特別に言及してはいないが，無視することはできない問題である。筆者の解釈によれば，〈セミオシス〉を解釈の連続的な過程，つまり時間の経過に沿って次々に解釈項が生み出される過程であると考え，表示関係はその過程の一位相に過ぎないと考えれば，その非還元的な三項関係性は矛盾なく説明できるように思われる。つまり表示関係が成り立っているのは，上に示した区別を使って言えば，表示項Aと直接対象項O_1と実的解釈項Bの三項の間であり，これが非還元的三項関係なのである。そして目的解

釈項Cとは，この三項関係をその一位相とする連続的な過程としての〈セミオシス〉の中で働いている，たとえば解釈に方向性を与える役割を果している項目なのである。この目的解釈項Cの働き方がどんなものなのか，二項関係なのか，三項関係なのかという点は今後の研究を待つほかないが，表示関係の非還元的三項性がこれによって無意味になるわけではない。いずれにしろ，この目的解釈項の位置付けは，ショートの〈セミオシス〉のモデルにとって，非常に重大な問題となるだろう。

4．2　志向性の説明…力動的解釈項

以下ではショートの挙げた例に従って，この目的論的過程での志向性の説明を検討してみよう[27]。

例1　不均一な化学物質の分布Aが見られる溶液のなかのゾウリムシが，濃度の高い側にのみ集まり，さらに食物に導かれるとき，この運動BはAを食物の表示と解釈している。この場合Aの対象項Oは食物の存在であり，目的Cは食物の消化，栄養補給，そして生存である。

例2　鹿が物音Aを聴き，危険を避けるとき，その鹿の運動Bは，身の安全を目的Cとして持っている。鹿は物音から逃げたのではなく，その物音Aが示すと解釈された侵入者から逃げたのであるから，その侵入者の侵入という事態が対象項Oである。

例3　或る犬の残酷な主人が杖を振りあげたとき，その犬が逃げ出したとする。このとき犬は，振りあげられた杖Aから逃げ出したのではなく，それによって打たれることOから逃げ出したのである。つまり逃げ出すという行動Bが，振りあげられた杖Aを，このままでは打たれるという事態Oの表示として解釈したわけで，目的Cはもちろん身の安全である。

このように，Aの存在がBを引き起こす端緒となり，しかもCを達成するための手段としてBが引き起こされるならば，Aは表示項であり，Bがその解釈項であり，CはBがその一段階を為す目的論的過程の目標，つまり目的解釈項であると解釈できる。そしてこの場合，表示項Aの示している対象項Oは，Bを為すことによってCを達成することが可能であるような状況あるいは事態である。

ショートによれば，パースの言う〈セミオシス〉がこのような目的論的な表示過程であると解釈できれば，ここにおいては，少なくとも志向性の本質要件である〈志向的非存在〉が説明可能になる。

なんとなれば，対象項Oが事実成り立たなくとも，つまり対象項が直接対象項O_1という単なる可能性に過ぎなくとも，表示項Aは目的（解釈項）Cの実現に向けて解釈項Bを生み出すことによって，対象項Oが事実成り立っているかのように解釈され得るからである。物音Aは侵入者が出したものでなくとも（つまり因果関係がなく，単に類似しているだけ）でも，逃げることによって侵入者の侵入を示すと解釈され，振りあげられた杖が背中を掻く目的であったとしても，ここでも再び，逃げることによって，そのままでは打たれると

いうことを示していると解釈されるのである。

ショートの提起したこの種の説明では，表示項Aからの導出を通じてでなければ，目的行動Bは志向的に対象Oと結び付いているとは言えないということが重要である。つまりAが起こる前にBは絶対に起こらないのであるから，これは単なる目的論的行動の説明ではなく，〈表示過程〉の志向性の説明となるのである。

以上の説明では力動的解釈項（＝行動）が例として与えられたが，すべての力動的解釈項が何等かの目的への手段となっているとは考えられない。しかしショートによれば，それが何等かの目的への手段でない場合でも，つまり行動それ自身が目的で行われる場合でもこの説明は有効なのである。

ショートの面白い例を引いてみよう[28]。

たとえば恋愛の過程における振舞いは，相手の眼差しや姿態などをその種の振舞いへの誘いとして解釈している。しかしそのような振舞いは，つねにではなくとも，多くの場合，それ自身を目的として行なわれる。(これはそのような行為がしばしば予想される結果を伴うということを否定するものではない。)しかしながら，これらの行為は，それ自身を目的として為されながら，まずは誘われる必要がある。というのも為された行為が，もし相手に喜んで受け入れられるものではなかったならば，期待された意味を持たないからである。

この場合，相手も同じ心持ちであるという事態を対象項Oとすれば，この対象的事態Oが成り立っているときに限り，タイプBの行動（力動的解釈項）はタイプC（目的解釈項）でもある。つまり行動Bを行なうことそれ自身が目的Cであるとすることができる。そしてこの場合には，相手の眼差しなどが対象項Oの成立の表示となる，というわけである。

このようにショートによれば，それ自身を目的として行なわれる行動も目的行動であり得る。行動Bは，表示項Aへの反応として為されたときに限り，Aの解釈項であり，このときBは，Aを対象的事態Oを示すものとして解釈するが，それ自身を目的として行なわれる行動の場合には，その対象的事態Oが，Bの形成を目的Cとするのを許すのである。

4．3　論理的解釈項

以上で略述されたショートの志向性の説明は，その例が動物行動の場合か，あるいは人間の場合でもいわゆる本能的行動に近いものであることから推測して，解釈項が行動である〈セミオシス〉にその有効性が限られるのではないかという反論が出てきそうである。またそれを理由にして，この説明は，「行動主義」と何ら異ならないという反論も出てきそうである。しかしこの，T. L. ショートの提出した説明は，力動的解釈項（行動）以外の解釈項，つまり高度な精神的働きを可能にする論理的解釈項や情態的解釈項の場合にも一般化できるという点で，少なくとも行動主義とは異なるということが理解されなければならない。

パースは上で述べたように三種類の解釈項を認めた。情態的解釈項(フィーリング)，力動的解釈項（行動），論理的解釈項（言語，思考，行為習慣）の三種類であるが，ショートによれば，論理的解釈項もまた目的への手段であるか，目的そのものである得る。

論理的解釈項である言語表現，思考，行為習慣がどのようにして目的への手段とされるか，どのように他の表示を解釈するかをショートの説明に沿って見てみよう[29]。

「漏斗型の雲は竜巻の予兆である」という思い（一時的な思考）と，それが見えたとき

には竜巻への備えをしなければならないという信念，あるいはその備えを実際する習慣は，安全という目的を持っている論理的解釈項の例である。これらの思考や信念は，漏斗型の雲について実際われわれに話されたこと，あるいは観察されたことの結果としてその場に現れてくる，少なくともここではそのような場合を想定する。したがってそのような場合，それらは，われわれに為された言明や観察された出来事を，漏斗型の雲と竜巻の間に成り立つ一般的な関係の実現としての状況Oの表示Aとして解釈する。しかしながらその為された言明や観察が正しくない場合にも，それらの論理的解釈項である思考や信念や習慣は，そのような一般的な関係が実現しつつあるかのように解釈し続けることもできる。このような意味で，この種の論理的解釈項を要素とする〈セミオシス〉も，〈志向的非存在〉を対象とすることができるように思える。

もちろんわれわれの思いや信念や習慣の多くは，特定の目的に向けらけているわけではない。しかしながらそれらも，ショートによれば，何時かその機会が訪れたときに，どんな目的であれ，その目的を達成するためにはどのように振舞うべきかを決めるために役立っている。たとえば，水は凍ると膨張するという信念に基づいて行動する機会は，私には一度もないかもしれない。しかしそのような機会がもしあれば，水は凍ると膨張するということが重大問題となるような目的を，その場の私は持っているはずである。そのような場合，私のその信念は，それに関連したそれまでの教示や，その場での観察や経験を，水の振舞いの信頼できる表示として解釈することになるであろう。そしてもちろんそのような場合，前例と同様に，それまでの教示や，その場での観察や経験が正しくない場合でも，その信念に基づいて行動し続けることができ，そのような場合には〈志向的非存在〉を対象とすることになるわけである。

論理的解釈項がそれ自身を目的として作られる場合はどうであろうか。

ショートによれば，それ自身を目的として，つまりそれ自身の形成を目的として，われわれが求める言明や信念は，「重要な真実」とわれわれが考えるものでなければならない。これをショートは，世界を理解する上での重要性であると限定するが，必ずしもそうする必要はないだろう。世界を良く理解するのは，善く生きるためであろうからである。

これらのそれ自身を目的とした論理的解釈項である言明や思考（B＝C）は，その端緒となった知覚や他者の言明を，一般的な意味での物事の有様（対象項O）の信頼できる表示項Aであると解釈する。そしてさらにそのような論理的解釈項が本当に真実であるかどうかをテストする過程が続いてゆく場合，言明や思考などの論理的解釈項はあくまで表示あるいは記号にすぎないから，われわれはそれらを，究極的には行為習慣によって解釈しなければならなくなる。つまり，実際に世界に対して働きかける行動の習慣を形成すること，あるいは以前からの行動の習慣を変更することによって解釈することになるのである。そうするときわれわれは，それに至る以前の段階では，仮の目的（B＝C）である論理的解釈項を追及することになるが，このときわれわれは，対象としては，この仮の目的に対応する〈志向的非存在〉を追及していくことになる。そしてこれは言ってみれば，実在としての対象に対応する，真の目的である習慣として形成された〈真なる信念の所有〉（究極的論理的解釈項）を実現するために行なわれるわけである。このような実践こそが科学である，というのがパースの〈プラグマティズム〉に他ならないが，以上のように〈セミオシス〉を解釈すれば，パースの〈一般表示理論〉と〈プラグマティズム〉が比較的矛盾な

く結び付くことになる。

4．4　情態的解釈項

情態的解釈項もまた目的への手段であるか，目的そのものであり得る。

目的への手段として働く情態的解釈項の例としてショートの挙げる例は，恥の感覚である。人は叱責を受けたとき，その原因となった行為を本当に悪いものであると理解するならば，恥じ入ると言われる。これを〈セミオシス〉として解釈すれば，叱責が表示項Aであり，その恥の感覚がその情態的解釈項Bである。そしてこの〈セミオシス〉は，叱責を受けた人の行為習慣を変更させることをその目的Cとして持っている。すなわち叱責の原因となった行為に対して気を重くさせて，二度とさせないという倫理的効果（習慣形成）を目的として持っているのである[30]。

確かにこれはショートの言うように，情態が目的への手段となっている例ではあるが，その場合，表示項Aの対象項Oは何なのだろうか。単純に叱責の原因となった行為であると言ってよいのだろうか。叱責を受けた側での叱責の志向対象，叱責という言語行為あるいはその言語行為を構成する言語表現の内容は，ただ単純にその原因となった行為というよりも，むしろその行為と叱責の因果関係であろう。しかしその場合に，もしその因果関係が成り立っていないとしたら，このタイプの〈セミオシス〉は成立するだろうか。つまり，叱責そのものは存在し，恥じ入るという情態的解釈項も存在し，かつまたその目的も満足しているにもかかわらず，表示項である叱責と，その原因となった（と叱責する側が考えた）行為との間に実は因果関係がなかった，つまりその叱責は，叱責する側の事実誤認か意図的な欺瞞に基づいていた場合に，この〈セミオシス〉は成立したと言えるのだろうか。もし叱責を受けた原因に思い当たる節がなかったならば，彼はそれを否認するだろうし，その行為に対しての別の価値観を持っている場合には正当化するだろう。したがってたとえそれが叱責する側の事実誤認や欺瞞に基づいていたとしても，本当に恥ずかしいと思うという情態的解釈項によってその叱責が解釈されたならば，その〈セミオシス〉は成り立っていることになり，その場合には叱責の対象項が〈志向的非存在〉であると言ってもおかしくはないと思われる。

ショートが，目的そのものである情態的解釈項として取り上げる例は，パースのお気に入りの例，つまり音楽作品の演奏を聴くことによって生み出されるフィーリングの例である[31]。これはショートが言うように，まさにそれ自身を目的として求められる情態的解釈項であるかもしれないが，表示理論的には扱い難い事例であると思われる。そこで以下では，演奏を聴くことではなく，楽譜を読むことを例としてみよう。この場合確かに演奏することや作品を分析することというような，情態的解釈項以外のものを目的としていることが多いが，それによって得られる音楽的フィーリング自身を求める場合もあるので，パースの事例と本質的に異なった種類の〈セミオシス〉であるとは思えない。

いかなるジャンルのものであれ楽譜を読んで音楽家が捉えようとしている対象は，その作品の持っている音楽的質であるというのは確かだろう。このような場合その表示である楽譜は，読む側に，その作品を聴くのと類似した音楽的質を起こさせているはずである。すなわち，ある意味では論理的な表示である楽譜は，読む側に情態的質を引き起こすことによって解釈される。そうするとき人は，そこで生み出された情態としての音楽的質が，

その作品の完全で正しい鑑賞であることを求めるものだが，つねにそれが得られるとは限らない。もう一度聴けばその鑑賞が深まる場合もあるし，色あせて聴こえることもあるように，楽譜を読むときにも正しいと思われる質に達することができない場合もある。そのようなすべての場合に，求められている音楽的質は，表示項において具体化されるべき質的可能性であり，それは表示の媒介が楽譜であろうと演奏であろうと変らないように思われる。とすれば，このような音楽作品の鑑賞は，すべての場合において，その対象として〈志向的非存在〉を持つことになるであろう。なぜなら求められているのは或る意味ではその作品のイデアであるからである。もしそうなら，多くの音楽作品は，同質性を表示の根拠とするイコン記号であるだけではなく，永遠の〈志向的非存在〉を実的対象項として持つ表示であると言えるように思える。芸術は表現的活動であって，表現されるべきものがその芸術作品の外に存在する必要はもちろんないが，すべての人間活動の場合と同じく，その完璧なイデアは，永遠の〈志向的非存在〉としてしかあり得ないのだから，芸術の〈セミオシス〉の本質はまさしく，このイデアとして〈志向的非存在〉をその対象項とするところにあるように思える。

5　結論…心の哲学の今後

以上で略述されたような〈セミオシス〉による志向性あるいは内容の説明がもし正しいとすれば，心の哲学に対して，以下のような幾つかの点で，新たな提言が可能であると思われる。

まず心の内容の非個人性ということである。上で説明されるように，〈セミオシス〉は解釈項の生成の連続的プロセスである。そしてそれらの解釈項のうちにはもちろん，フィーリングだけの場合や行動の内に含まれる特有のフィーリングのような，他者には実感不可能な〈内容〉が存在する。しかし日常の反省からもわかるように，解釈項の大部分は論理的なもの，つまり言語表現か行為習慣という，存在論的には普遍的な，社会現象であるように思える。

この〈心の非個人性〉はまた，〈セミオシス〉の構造的な側面からも洞察できる。というのも知識あるいは信念の内容といわれる〈命題〉あるいはその複合体としての〈理論〉は，論理的解釈項によって，非個人的な，拡大された〈セミオシス〉を通じて伝播し，その拡大された〈セミオシス〉の全体において行為習慣として定着，あるいはその変更という形で存立するものだからである。

第二には，内的表示と外的表示の区別が取り払われるということである。上で見たように，現代の認知科学の大部分が仮定している〈表示〉は，内的なもの，つまり〈心の言語〉である。しかし心の存立形態を上記のような〈セミオシス〉と考えれば，このような心の言語と，日本語や英語のようないわゆる日常言語との区別は，少なくとも，その内容に関しては意味が無くなるように思われる。というのも双方とも，拡大された〈セミオシス〉においては，表示項であると同時に解釈項でもあるからである。つまり集団の中の連続的な〈セミオシス〉においては，内的表示であれ行為習慣であれ，解釈項として生成された論理的存在は，さらに同一人の中でか，別の個人によってか，どちらでもよいが，そこのおいて生じた別の解釈項によって，或る内容を表す表示項と解釈されるからである。これはいわゆる音声言語のような線型言語について言われるだけではない。写真や地図，音楽

やビデオ画面のような表示についても言えることである。これらと実際の知覚におけるイメージとの間に，本質的な意味での〈内容〉の違いがあるわけではない。ただしそのような手段によって，内容が外在化できるということ，つまり時間と空間を越えて蓄積および伝播ができるということは，人間の高度な文化の存在の基礎的な前提であるとは思われるが。

注

1）いわゆるプラグマティズムの祖でありながら，体系的著作を残さなかったがために埋もれてしまったアメリカ合衆国の初期の一哲学者，と見做されてきた C. S. パースが，デカルトに始まる近代哲学の根本前提を転倒せしめた大哲学者であったという事実は，パース研究家の間では夙に指摘されていた。しかしいま漸くこの事実が一般にも認められつつあるようである。最近「記号論」に関係するパースの論文のアンソロジーをまとめた J. フープスの次の指摘がそれを如実に物語っている。

「パースの記号論は，彼はそれを Semeiotic と綴るのを好んだが，心の哲学の歴史の一段階，特にルネ・デカルトとジョン・ロックによって17世紀に定義されたような知識についての西洋哲学の伝統的問題の拒絶と見做すのが最も良く理解できる。」

(J. Hoopes (ed.), *Peirce on Signs*, Univ. North Carolia Press, 1991, pp.5-6.)

フープスによれば，パース哲学の本質は，デカルト，ロック以来引き継がれてきた二元論の隠れた前提，すなわち自己知識の確実性の信念を完全に捨て去ったことにあるのだが，そしてそれはその限りでは全く正しいのだが，この革命を成し遂げる或る段階で，パースは，心の哲学における最重要課題である「志向性問題」に，或る一定の解答を与えている点を見落してはならないだろう。小論は，この志向性問題に対してパースの記号哲学が与えた一定の解答の内容を明らかにしようという試みである。

なお，本文および注における 'CP. n. m'は，従来行なわれてきたように，Peirce, C. S., *Collected Papers,* Harvard Univ. pr. の巻番号とパラグラフ番号を意味する。

2）Short, T.L., "Semiosis and Intentionality", *Trans. Peirce. Soc.*, vol.17., 1981.

3）Campbell, Keith, *Body and Mind*, Notre Dame Univ. Pr., 1984., pp.20-25.

4）Dennett, D., "Current Issues in the Philosophy of Mind", *Amer. Phil. Quort.*, vol.15, p.257.

5）ibid.

6）Chisolm, R., *Perceiving; A Philosophical Study*, I thaca, N.Y. 1957.

7）Dennett, D., op. cit., p.257.

8）表現全体の真偽が直接構成要素の真偽のみによって決まる言語表現。

9）Dennett, D., op. cit., p.257.

10）Davidson, D., *Action and Event*, Oxford, 1980, p.4.

11）Z. W. ピリシン，信原幸弘訳，「認知科学の計算理論」，産業図書，1988年および Fodor, J. A., *The Language of Thought*, New York, Crowell., 1975を参照されたい。

12）Cummins, R., *A Companion to Epistemology*, Black Well, 1992, pp.442-443.

13）ibid.

14）詳しくは，パース著作集 2「記号論」内田種臣編訳，勁草書房，1986年，Hardwick, C. S., (ed), *Semiotic and Significs*, Indiana Univ. pr., 1977, J. Hoopes (ed.), *Peirce on Signs*, Univ, North Carolia Pr., 1991を参照されたい。

15）パース著作集 1「現象学」米盛裕二編訳，勁草書房，1986の訳者解説を参照されたい。

16）（原稿参照）

17）Marty, R., "C. S. Peirce's Phaneroscopy and Semiotics", *Semiotica* 41-1/4, 1982, pp.169-181.

18）詳しくは，伊藤邦武「パースのプラグマティズム」，勁草書房，1985年，第三章を参照されたい。

19）Herzberger, Hans G., "Peirce's Remarkable Theorem" in *Pragmatism and Purpose; Essays presented to Thomas A. Goudge*, Summer, L. W. (ed), pp.41-58, Toront Univ. Pr., 1981におい

て，その数理論理学的証明が試みられている。

20) 詳しくは，パース著作集2「記号論」を参照されたい。

21) Short, T. L., op. cit.

22) Searle, J., "Minds, Brains, and Programs" in Haugeland, J., *Mind Design*, MIT Pr., 1981.

23) CP. 5.491.（邦訳： パース著作集3「形而上学」遠藤弘編訳，勁草書房，pp.27-28）および，Short, T. L., op., p.204.

24) CP. 5.472.（邦訳：パース著作集3「形而上学」，p.16）

24) CP. 5.473.（邦訳：パース著作集3「形而上学」，p.16）

26) Short, T. L., op. cit., pp.207.

27) Short, T. L., op. cit., pp.207-208.

28) Short, T. L., op. cit., pp.209-210.

29) Short, T. L., op. cit., pp.210-211.

30) Short, T. L., op. cit., pp.211-212.

31) CP. 5.475.（邦訳：パース著作集3「形而上学」，p.20）

（平成5年9月13日受理）